

しものべさか

下延坂遺跡 (本発掘調査B)

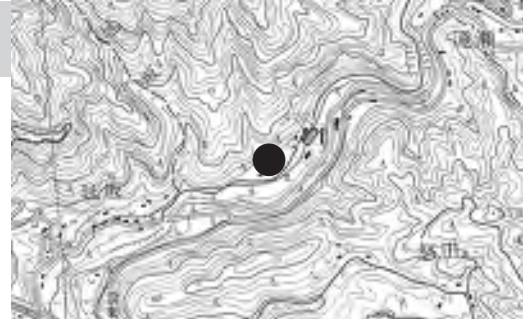
所在地 北設楽郡設楽町川向字上延坂・下延坂
(北緯35度06分58秒 東経137度34分28秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年6月～令和5年1月

調査面積 4,700㎡

担当者 永井宏幸・川添和暁・渡邊 峻



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて、令和4年6月から令和5年3月にかけて実施した。調査面積は4,700㎡で、東を流れる境川と西の山側の町道79号の間に広がっている。北から順に22A区、22B区、22C区の三ヶ所に調査区を設定した。

立地と環境 下延坂遺跡は境川右岸の川岸段丘から山麓の丘陵斜面に立地する遺跡で、本年度の調査区は、昨年の下延坂遺跡の発掘調査における調査区21B区の西側と町道79号の間を22A区とし、22A区の南側から昨年の調査区21B区と21C区の続きの範囲の内、北側の突出部を22Ba区とし、残る南側を22Bb区、22Bb区の南側を22C区とした。22A区の調査区の大部分は山の斜面に沿った石垣が残る棚田により削平されている。22A区に続く22Ba区は昨年の調査区でも確認された、かつて調査区に存在した養鶏場のコンクリート基礎が存在し、22B区と22C区を含む南側は植林による杉林が形成されていた。また、22C区の南側には西の山側から続く沢が流れており、南に向かって傾斜している。

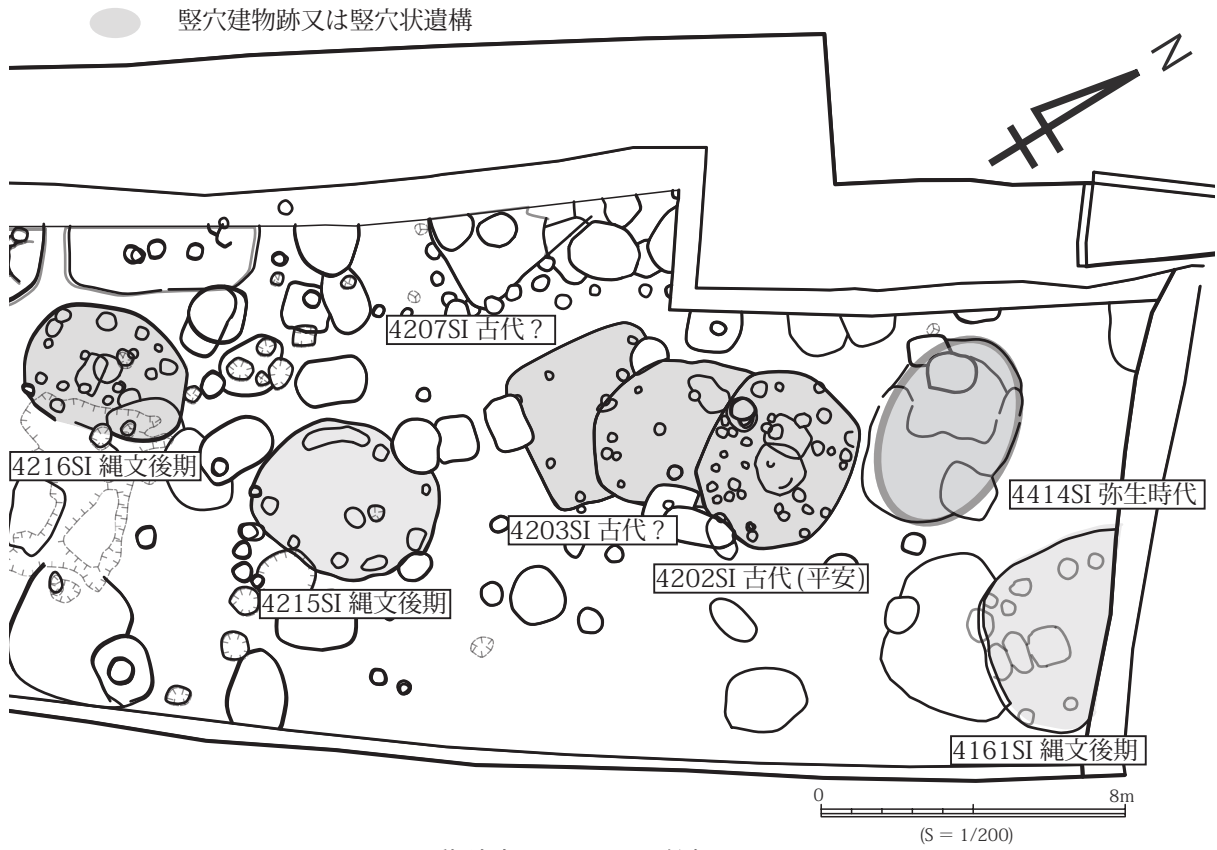
調査の概要 基本層序は第1・2層が調査区の北(22A区・22Ba区)と南(22Bb区・22C区)で若干異なる。

北側の22A区と22Ba区は第1層が調査区西を走る町道79号に伴う盛土による1~2m近い整地層である。22A区の第2層は棚田に伴う20cm前後の耕作土の層となる。第3層は所々に土石流の痕跡が見受けられる無遺物層の40cm前後の茶褐色の砂礫層、第4層が褐灰色の20cm前後の砂礫層で、第5層が無遺物層の黄褐色の40cm前後の砂層である。また22A区の調査区西壁のセクションを観察した結果、北から南にかけて地形が傾斜していることが確認された。一方22Ba区は3m近い1層目の盛土で、第2層は60cm前後の黒褐色の砂層となる。第3層は22A区の第4層で確認した20~50cmの褐灰色の砂礫層、第4層が22Ba区の第5層である黄褐色の砂層となる。おそらく先に述べた地形的な傾斜により22Bbでは22A区の第2層まで道路工事の盛土によって削平されていると思われる。また、22Ba区の西壁セクションを観察すると、南から北にかけて傾斜している。22A区と22Ba区の境付近が一番深い谷状の地形と思われる。

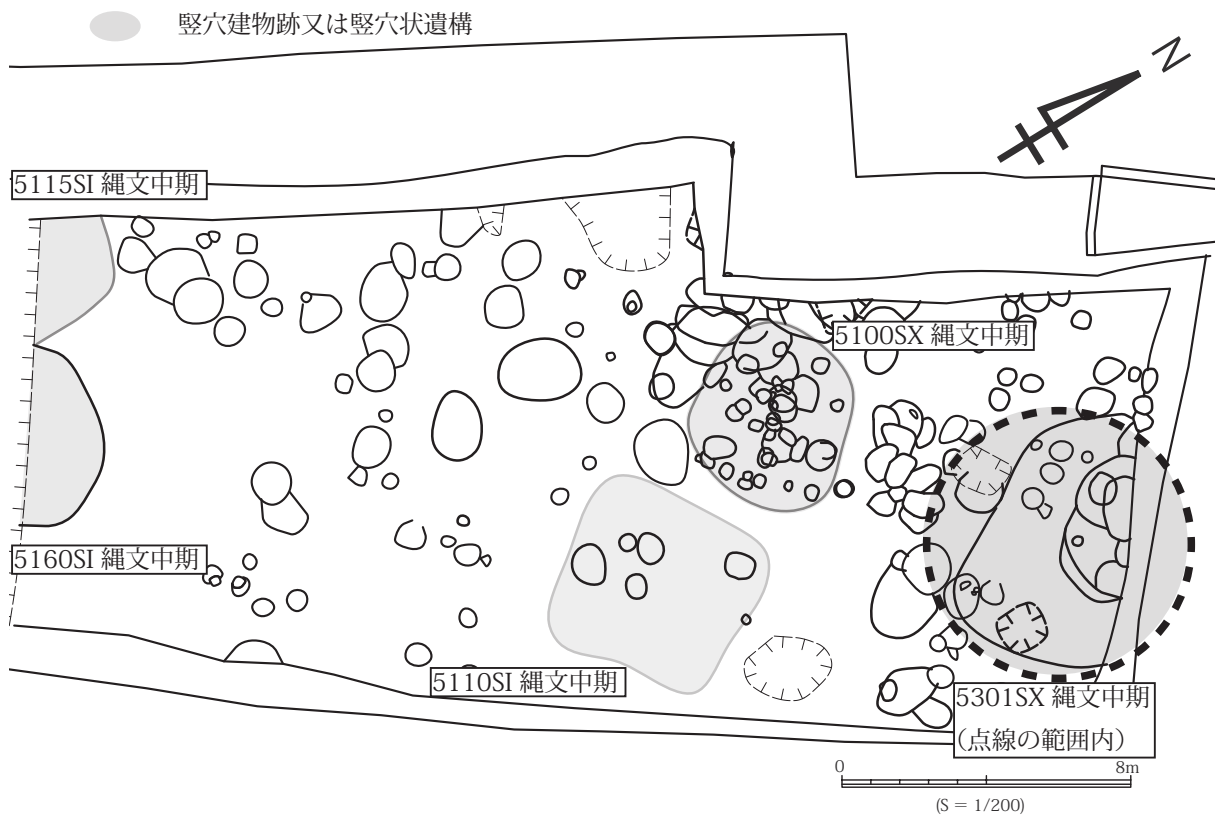
南側の22Bb区と22C区では北側のような道路の盛土は確認されないが、代わりに植林や(第1層)や畑作(第2層)によって削平されており、北で確認された褐灰色の層は一部までしか残っていなかった(第3層)。第4層の黄褐色の砂層は所々に土石流の痕跡があり、第5層の明黄褐色の礫層、地山の岩盤層と続く。22Ba区の黒褐色層が縄文時代後期、各調査区の褐灰色層が縄文時代中期、黄褐色の無遺物層が縄文時代前期、明黄褐色層が縄文時代早期を想定している。



下延坂遺跡 遺構全体図 1 面目 (S=1/1,250)



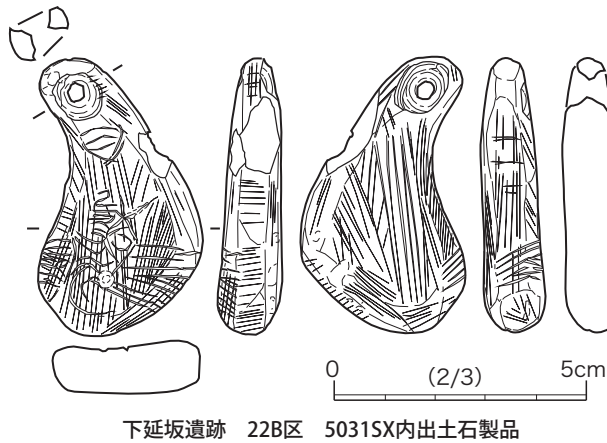
下延坂遺跡 22Ba 区 1 面目 略測図 (S=1/200)



下延坂遺跡 22Ba 区 2 面目 略測図 (S=1/200)

- 中 世 縦穴状遺構3001SXと3002SXは22A区の黒褐色の土層から検出された遺構であり、
 2 2 A 区 3001SXが3002SXを切っている関係にある。遺構は22A区の調査区西壁に続いており、断
 3 0 0 1 S X 面を確認した限りでは立ち上がりと底部で平坦面を確認し、弥生土器と思われる土器片
 3 0 0 2 S X と石器も数点確認されたので当初は方形の縦穴状遺構が想定された。しかし、どちらの遺
 構も柱穴や炉跡などは床面で確認されず、3002SXからは山茶碗の小皿が確認されたので、
 中世の耕作地とそれに伴う耕作土であったと思われる。
- 2 2 B 区 4202SIは22B区北側の一面目の黒色の土層から、中央北寄りで検出された直径約4mの
 4 2 0 2 S I やや楕円形な縦穴状遺構である。遺構の壁面に壁柱穴と思われる複数の土坑と、縦穴の中央
 北寄りに炭化物が比較的多い土坑が確認され、これが炉跡と思われる。この炉跡付近を
 掘削中に床面から灰釉陶器の高台が確認されたので、時期は古代(平安)と推測される。
- 2 2 C 区 6096SLは22C区と22B区の境付近で確認された直径約1m前後の遺構で、22B区1面
 6 0 9 6 S L 目の中世の耕作域と同じ茶褐色の土層より確認された。炭化物と焼土が良好な状態で纏ま
 って出土しており、鉄片が1点確認された。付近に縦穴や柱穴が確認されなかったので、屋
 外の鍛冶場遺構と思われる。
- 縄文後期 4161SIは22B区北側1面目の黒色土の層より検出された、昨年の調査区21B区との境に
 4 1 6 1 S I 半分切られている縦穴建物跡である。直径は推定で4m以上の隅丸方形の形と思われる。
 複数の壁柱穴と炉跡と思われる炭化物を伴う土坑が検出され、複数の縄文土器の土器片
 (後期初頭)と石器(剥片)が出土した。
- 4 2 1 5 S I 4215SIは22B区北側1面目の中央南寄りの黒色土の層より検出された。直径4m前後の
 円形の縦穴建物跡である。複数の壁柱穴と、中央やや東寄りに炭化物を伴う炉跡と思われ
 る土坑が確認される。遺物は少ないが、後期初頭の土器片と石器(剥片)が数点確認床面で
 確認されている。
- 4 2 1 6 S I 4126SIは22B区北側1面目の黒色土の層より検出された、直径3.5m前後のやや楕円形
 の縦穴建物跡である。複数の壁柱穴と、中央に炭化物をわずかに伴う炉跡と思われる小
 さな土坑が確認される。また、縦穴建物跡の埋土の中や4216SIを切る形で存在する土坑
 4373SKでは多数の拳大の礫が集中して検出されたことから、使い終わった縦穴に礫を廃
 棄していたのかもしれない。
- 2 2 C 区 6099SKと6100SKは22C区2面目の南東、茶褐色の土層で確認された良好な縄文土器の
 6 0 9 9 S K まとまりを伴う土坑であり、直径1m前後の楕円形の6099SKを直径80cm前後の同じく楕
 6 1 0 0 S K 円形の6100SKが切っている関係である。6099SKと6100SKはそれぞれ別個体の縄文土器
 を伴っており、時期はどちらも後期の土器と思われる。6099SKは縄文土器の下に複数の
 礫が確認され、意図的に礫を配置しその上に縄文土器を置いたようである。6099SKは更
 に2層に別れ、下層では被熱した拳大の礫が数点、同じく被熱した40cm前後の巨礫が出土
 し、焼土も確認された。石囲炉であったのを解体し、土器と共に埋めた可能性がある。

- 縄文中期** 5110SIは22B区北側の2面目の褐灰色の土層より検出された、直径3.5m前後の円形の
5110SI 堅穴建物跡である。壁柱穴と炉跡と思われる、石の抜き取り痕がある土坑が床面の中央やや南寄り
 で検出される。遺物は縄文時代中期後半と思われる土器片と石器(剥片)が数点確認され、堅穴の埋土より石棒
 と思われる円柱状の石器が炉跡の付近で確認された。
- 5100SX** 5100SXは22B区北側の2面目の中央付近、褐灰色の土層より検出された直径5m近い隅丸方形の遺構である。しかし5100SXでは複数の大型土坑に切られており、トレンチでは立ち上がりを確認できたのだが柱穴や炉跡などの付属施設は確認されなかった。5100SXは例年の下延坂遺跡の調査では例がないほど、多くの遺物が検出されている。いくつかは切っている複数の大型土坑に属するものであるが、床面の検出段階で凡そ80点近い遺物を点上げし、それ以上の数を一括遺物として取り上げた。縄文土器は縄文時代中期後半のものがほとんどで、石器は多数の剥片と、黒曜石の石鏃数点が確認される。またこの堅穴状遺構の床面で検出された50cm前後の土坑5255SKでは、5110SIで確認されたような石棒と思われる円柱状の石器が検出された。
- 5301SX** 5301SXは22B区北側の2面目の褐灰色の土層より確認された、多数の巨礫と遺物を伴う谷状の遺構である。22B区北側から22B区調査区の北側の境に向け広がっている。出土する遺物は縄文中期後半の土器片やそれに伴う石器が多い。石器は剥片や丸石、皿石などの他に、20点以上もの黒曜石の剥片と、1点の石鏃を確認した。また調査区の境の壁断面で確認できる谷状の落ち込みの一番下層からは、縄文時代後期のものと思われる土器片が纏まって出土している。たまたま落ちた可能性もあるが、その土器の周辺だけ別遺構が展開している可能性もある。残したベルトのセクションで確認したい(2月10日現在)。また、注目される遺物として、縄文時代中期後半の土器と一緒に出土した岩偶が挙げられる。詳しくは後述するが、この時代のものとしては貴重な資料である。
- 縄文早期** 5056SIは22B区の2面目の南端、茶褐色の土層より検出された縄文時代早期後葉と推定
22B区 される直径約3.5m前後の円形の堅穴建物跡である。22B区と22C区の調査区の境目にトレン
5056SI チを設定し掘削していた際に、茶褐色の土層より縄文時代早期の繊維土器が確認された。2021年度の下延坂遺跡の調査でも数点土器片が確認されていたので、周囲を精査したところ切り合い関係にある堅穴状の落ち込みが2棟確認された。5056SIはもう片方の堅穴建物跡5058SIを切っている堅穴建物跡である。トレンチの断面では床面と思われる平坦面と立ち上がりが確認されたが、残念ながら柱穴などの遺構や遺物は確認されなかった。
- 5058SI** 5058SIは22B区と22C区の2面目を跨る形で展開する、茶褐色の土層より検出された縄文縄文時代早期後葉と推定される直径約3m前後の円形の堅穴建物跡である。こちらも先の5056SIと同じように床面と立ち上がりは確認されたが、遺構・遺物は確認されなかった。
- 22C区** 6101SKは22Cの2面目の南東、茶褐色の土層で確認された良好な縄文時代早期後半の
6101SK 土器のまとまりを伴う直径30cm前後の土坑である。土器は礫に覆われており、意図的に礫を配置したと思われる。
 (渡邊 峻)



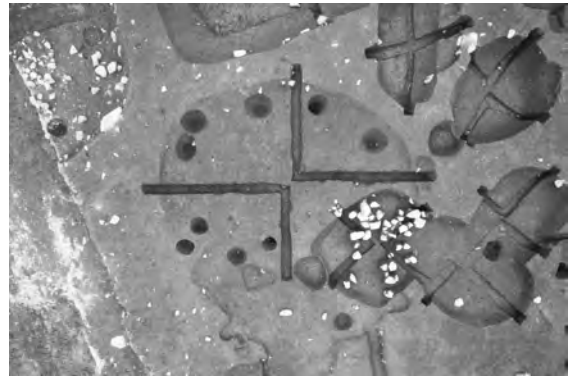
下延坂遺跡 22B区 5031SX内出土石製品

左図の石製品は、くの字に屈曲した扁平礫の表面を調整加工後、穿孔や線刻が施されているものである。調整は、一部側面の研磨を除き、剥片石器などによるケズリを主体とする。穿孔は図面上側の大きいものと、図面下側の身部中央に小さい盲孔が認められる。線刻は3条を1単位としており、脇にはそれを括るような直線・曲線も施されている。時期は縄文時代中期後半の神明式～取組式期と考えられる。石材は、当地にある砂質凝灰岩もしくは凝灰質砂岩で、後の縄文時代後期中葉以降に当地で出現・盛行する岩偶岩版類と使用石材は同じである。

(川添和暁)



下延坂遺跡 全景(北東より)



下延坂遺跡 22Ba区(1面目) 竪穴建物跡4216SI



下延坂遺跡 22C区(1面目) 炉跡6096SL(東より)



22B区北側(2面目) 竪穴状遺構 5100SX遺物出土状況(東より)



22B区北側(2面目) 谷状遺構 5301SX(北より)



22B区北側(2面目) 岩偶 出土状況(西より)